

清朝外務部の研究(仮題)

川島 真

[kawashima@waka.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:kawashima@waka.c.u-tokyo.ac.jp)

はじめに

- (1) 外務部研究の意義と重要性、研究史の問題
- (2) 個人的には、将来的に『清朝外務部の研究』をまとめたいと考えている。
- (3) 本書(東大出版会の論文集)の中での位置づけは、総署時代の論文が続く最後に位置づけられる。

■互市 ⇒ 夷務 ⇒ 洋務 ⇒ 外務へといたる中で、互市の変容にともなって生じた「各国事務」が次第に複雑、膨大になり、総理衙門や南北洋大臣、あるいは地方大官がそれぞれ役割を担った。だが、義和団事件を経て、西洋的な意味での近代国家を志向する「新政」が始められることになったことを背景に、また各国事務を diplomacy として位置づける要請が強まっていたことを背景に、「洋務」の諸業務が郵伝部などにも分割され、diplomacy に属すると考えられた部分が外務部の職掌とされた。礼部の対外関係における役割は大きく縮小し、1906年には太常寺、光祿寺、鴻臚寺を吸収し、また1911年には典礼院へと改称し、朝廷の内的な典礼をつかさどる機関となっていった。もし、清末の対外関係を礼部管轄の進貢関係と、互市から洋務へと展開した総理衙門管轄の領域との二重関係、ダブルスタンダードだとするならば、日清戦争を経たこの外務部の時代に、前者が大幅に縮小し、後者が対外関係のほぼ全体を占めるというかたちで、ひとつの結論が出たということになるであろう。そうした意味で、本書で論じられる諸問題のひとつの帰結が本章で述べられるということになる、と考えている。

■しかし、後の中華民国外交部と比較した場合、清朝外務部には総理衙門と連続する特徴、あるいは清朝としての特徴が見られることも確かである。たとえば、たとえ外務部が臨時の機関ではなくなったにしても、出使大臣の関係や、各官僚が上奏が可能なことなどは基本的に清朝の官僚としての特徴であるし、また外務部内で満族幹部が占める位置、また皇族外交が一定の機能を果たしたことなどは、民国外交部には見られない傾向である。組織論的には、総理衙門時代の地域別と民国期の職務内容別の間中に位置しているとも言える。

- (4) 史料のこと

■外務部档案の限界(第一歴史档案馆、中央研究院近代史研究所、国家図書館分館)

■国家図書館蔵清代孤本外交档案(52冊)、同続編(20冊) / 国家図書館蔵清代孤本内閣六部档案(38冊)、同続編(48冊)

- 『清代外務部中外関係档案史料叢編』シリーズ。スペイン、オーストリア、イギリス。
- 『儀若日記』(鄒嘉来日記)、『那桐日記』
- 『清季外交史料』、『清光緒朝／宣統朝 中日交渉史料』などの民国期編纂の公刊史料
- 『申報』 North China herald などの新聞類
- 日英米の外交文書。あるいは、*The Diaries of Sir Ernest Satow, British Envoy in Peking, 1900-06 (Volume Two, 1904-06)*など。

## 2. 節立て

### (1) 本書(東大出版会の論文集)

はじめに

- 第一節 辛丑和約と外務部の成立—組織・人事・制度—
- 第二節 礼部と外務部—ダブルスタンダードの変容—
- 第三節 中国をめぐる国際政治—新通商体制と外交団—
- 第四節 光緒新政の下の外務部—立憲君主制度と皇族外交—

おわりに

### (2) 各節の内容紹介

#### ■ 第一節 辛丑和約と外務部の成立—組織・人事・制度—

戊戌変法における外交関連の改革案をふまえた上で、総理衙門時期、民国外交部時期との相違をふまえた組織、制度、人事について整理する。組織については、前後の時代との比較と、職種・地域の別、また地方交渉司制度についても一瞥する。人事については、職員の一覧を作成しながら、リクルート、キャリアパターンについて検討する。制度については、権限の問題、出使大臣との関係などを整理する。すでに『中国近代外交の形成』において議論しているが、民国期に説明がひきつけられていたので、本稿では外務部に焦点をあてたい。

#### ■ 第二節 礼部と外務部—ダブルスタンダードの変容—

これまでの研究にはない部分になろう。1899年の会典について紹介した上で、朝鮮の進貢停止後のいわゆる朝貢の状況について整理する。これは、ダブルスタンダードのひとつのスタンダードが、いかにしてフェイドアウトしたのかということを追跡するものでもある。進貢の状況が実際にどのようなようになったのか、担当部局である礼部がどのような組織変更をおこなったのかということを紹介したい。他方、「過去」となったかつてのスタンダードが、歴史としてどのように語られていくのか、ということについても意識的に述べてみたい。

#### ■ 第三節 中国をめぐる国際政治—新通商体制と外交団—

清末中国における列強の利権をめぐるマグナカルタとされる天津・北京条約[坂野正高]とともに重要だとされる辛丑和約およびその前後に締結された諸条約の内容を確認した上で、外務部時代の清の条約締結状況について借款を含めて検討する。特に、マッケイ条約について先行研究に留意してまとめた上で、近代国家に必要な法制を整えていく過程や国権回収運動への道程を考察する。他方、郷紳らによる利権回収運動と外務部の外交との関係につ

いても触れてみたい。

#### ■ 第四節 光緒新政の下の外務部—立憲君主制度と皇族外交—

光緒新政下の清朝は、立憲君主政体を目指した法政改革を断行した。これによって、国体は大きく変化し、中央官庁の組織制度のみならず、地方自治にともなって中央・地方関係にも変容が見られた。この中で外務部外交にはどのような変容があったのか。また、外務部期には皇族外交が大いに展開されたが、皇族が外交をおこなうことと、立憲君主制度はどのような関係があるのかについても考えてみたい。

### (3) 別途議論したいこと

#### ■ 地方交渉

#### ■ 人類館事件などヒトの移動とナショナリズム、それと外交の関係

#### ■ 日露戦争、第二回ハーグ平和会議などのディテール

#### ■ 辛亥革命に至る過程での中国外交

#### ■ 日中関係(日英同盟、日露戦争など)

#### ■ 光緒朝と宣統朝の相違?

#### ■ 民国期への継承

### [主要参考文献]

飯島渉「裁釐加税」問題と清末中国財政：一九〇二年中英マッケイ条約交渉の歴史的位

(『史學雑誌』102(11)、1993年11月)

飯島渉「1903年中日改訂通商条約の締結について—「マッケイ条約体制」と中国」(『人文研究』

44巻12号、1992年)

岡本隆司「清末民国と塩税」(『東洋史研究』58巻1号、1999年6月)

川島真『中国近代外交の形成』(名古屋大学出版会、2004年)

本野英一「辛亥革命期上海の中英債権債務処理紛争：一九一〇年「ゴム株式恐慌」後の民事

訴訟例分析」(『東洋史研究』60巻2号、2001年9月)

王立誠『中国近代外交制度史』(甘肅人民出版社、1991年)

蔡振豊『晚清外務部之研究』(国立中興大学[台湾]歴史学系碩士論文、2005年7月)

陳森霖『中国外交制度現代化—1901—1911年之外務部』(私立東海大学[台湾]歴史学研究所

碩士論文、1994年5月)

陳体強『中国外交行政』(商務印書館、1945年)

唐啓華「陸徵祥與辛亥革命」(中国史学会編『辛亥革命與20世紀中国』上冊、中央文献出版社、

2002年所収)